

子どもを望むカップル十組のうち一組が不妊に悩んでいるとされるが、晩婚化の中で不妊治療のニーズはさらに高まっているという。治療の最新情報を求めて、県内で高度生殖医療（ART）に取り組む長崎市の岡本ウーマンズクリニック（岡本純英院長）を訪ねた。

（生活文化部・小出久）

不妊治療の現場訪ねる

長崎

同クリニックには一般の診療所とは様相の異なる一室がある。「培養室」。雑菌を排除するクリーンルームになっていて、大型の顕微鏡や卵子・精子の培養庫などが並ぶ。「体外受精」や「顕微授精」といったARTを支える拠点だ。

体外受精であれば、体内から卵子を採取し、受精、培養、そして胚（はい）受精卵を子宮内に戻すという流れになる。自然妊娠であれば、温度、湿度、pHなどが精密に管理された体内環境で行われる過程が、外部で行われることになる。それゆえクリーンルームなどの施設・設備が必要になるわけだ。

日本産科婦人科学会はART実施施設の登録を義務付けているが、二〇〇六年に登録要件と設備基準を厳格化したところ適合する施設はそれほど多くなかったという。

治療成績はスタッフの力量にも大きく左右される。例えば、培養庫から胚を子宮に戻すまでの時間は二分程度が望ましいとされる。岡本院長は学会認定の「生殖医療専門医」に加え、「生殖補助医療胚培養士」「生殖補助医療管理胚培養士」の資格を持つ。管理胚培養士は全国でも十人しか

いない上位資格だが、岡本院長は「どんなに磨いたって磨き切れない、奥の深い世界」と言う。

同クリニックでは精神面のケアを含めたカウンセリングに力を入れ、「不妊コンサルタント」の資格を持つ看護師らが対応している。

不妊治療をめぐるっては、今年大きな変化があった。日本産科婦人科学会が体外受精などで子宮に戻す胚の数を原則一

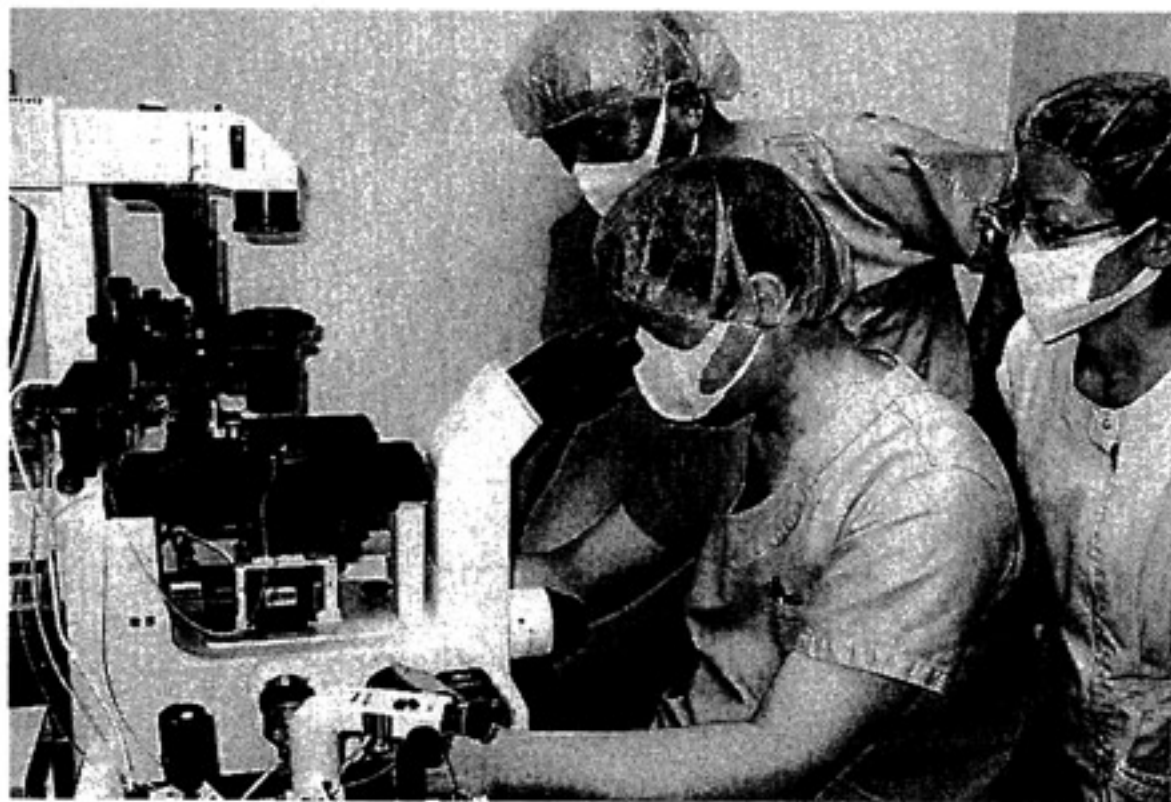
個とする見解をまとめたのだ。従来は妊娠する確率を上げるため、胚を二、三個を戻すのが一般的だったが、二人以上を身ごもる多胎妊娠の可能性が高くなり、妊娠中毒症など母子への危険が大きくなる問題があった。一方で、一個だけ移植するということは多胎妊娠のリスクは避けられるが、その一個の質がより問われることを意味していた。

そこで、同クリニックは基本的に、受精後五日目で細胞分裂の進んだ「胚盤（はいばん）胞」の段階まで育ててから移植することにした。移植する胚は受精後二、三日目を使うのが一般的だが、五日目まで育つこと自体が良好な胚であることの証しになる。まずは受精後二、三日目の胚を一個移植し、残りの胚を胚盤胞まで育てて凍結保存し、次の移植に備えるといったテクニックも使うという。

不妊治療は各種検査をして不妊の原因を調べながら、①排卵日を狙って性交渉するタイミング療法②子宮内に精子を注入する人工授精③体外受精④顕微鏡下で卵子に直接精子を注入する顕微授精——というステップを踏むのが基本。しかし、年齢次第ではのんびりもしてられない。

岡本院長は「女性は三十五歳を過ぎると妊娠能（にんよう）のうー妊娠する力）が大きく低下し、四十歳を超すと妊娠はかなり難しくなる。子どもが欲しいなら、できるだけ早急の確な治療を受けてほしい」とアドバースしている。

顕微鏡などが並ぶ「培養室」。岡本ウーマンズクリニックでは岡本院長（中央奥）ら5人の「胚培養士」が不妊治療を支えている。長崎市江戸町



体外受精 多胎妊娠防止も

高度化する胚培養技術

健康生活